

戦後詩ノート

——吉本隆明と戦後詩——

松島 淨

一 戦後詩とはなにか

人は自分が体験した思想を詩作品の中に織り込んで表現することは案外難しいものである。ある時はテーマが独り歩きしたり、ある時は習い覚えた方法と自分が表現したい思想が乖離してしまうこともある。思想と方法がうまくかみ合うのは稀有なことなのである。

吉本隆明も敗戦後の体験を詩作品に包括して独自の作品を書くに至るまでには葛藤と苦労があったことは言うまでもない。このノートはその間の試行過程を一九四五年八月から一九五〇年までの五年間の詩作品を読みながら検証するところにある。

ところで吉本隆明には『増補戦後詩史論』という労作がある。これはもともと一九六〇年前後にユリイカから出た『現代詩全集』全六巻に書いた戦後詩史論が下敷きになっている。これに当時大和書房にいた編集者の小川

哲生が目をつけ、その続編を書いてもらい一冊の本にしようとしたのである。そこで一九七六年に仙台での講演があり、その演題が「戦後詩の体験」だったこともあり、その講演をもとに書かれたのが初版の『戦後詩史論』の第二章だったのである。いまその時の講演と書き下ろされた第二章を読み比べると、相当推敲されていることがわかる。一度話すことで吐き出された思想が再度推敲されて文章になるとこんなにもまとまるのかと驚くばかりである。

その「戦後詩の体験」の中で吉本隆明は戦後詩とは何かについて次のように書いている。すこし長くなるが引用したい。

「戦後詩とよぶものは、戦争をくぐりける方法を詩の上で考えることを強いられた詩のことであるといえ、いくらか当たっている。べつの言葉でいえば、戦乱によって日常の自然感性を根こそぎ疑うことを強いられた詩といってもよかった。認識ないしは批評を絶えず感性や感覚のなかに包括しながら詩が展開されるので、日常の自然感性に類するものは、すくなくとも表面からは影を払ってしまった。それが日常の自然感性に慣れて、それを詩とみなす人々にとって難解なとっつきにくいものにした。詩に安んずる感をもたらずよりも、詩に考え込むことを強いるという具合にならざるをえなかった。戦後詩はその突端の感性的な水準でいえば詩から慰安をうけとろうとするもの、詩とはリズムに乗った言葉による解放感や快感であるとするものを、自ら拒んだ世界に入り込んでしまったのである。日常的な生存や生理的な自然死の世界のほかにも、生や死の体験（強いられる）世界がありうることを、詩人たちは体験し、その体験を詩的な比喩となしえないかぎり作品は成立しなかったのである。」

これはなかなかの名文である。一九四〇年代後半に自分らしい詩作品の創作に苦心していた、当時の苦渋が反

映しているとおもわれる。この難しい体験のちに「言語にとって美とはなにか」を書かせることにつながるからである。ここで言われている「戦争をくぐりぬける方法を詩の上で考える」ということは口で言うのは簡単だが、実作する詩人にとっては大変なことであり、それを実践することは並大抵の努力ではなかったはずである。吉本隆明もそのために約五年間の月日を要したと考えられる。あの戦争とは何であったのか。自分もまたその渦中にただけに、それを対象化するのには困難を極めたはずである。しかもその社会認識と政治的思想を構築したうえでそれをさらに私的表現に反映しなければならなかった。戦地での体験こそなかったけれど、身近かな人の死を敗戦まぢかに知らされるといえることがあった。そしてそのすぐ後に敗戦がきたのである。戦争の犠牲と敗戦が重なって訪れた。その二つの衝撃が一挙に襲ってきたわけである。しかもその当時信頼していた文学者、例えば小林秀雄や高村光太郎などいずれも考える指針も方向性も与えてはくれなかった。あとは自分ひとりで考えるしかなかった。空虚と再建の葛藤する不安定な時代だったと思う。しかし今から考えると敗戦後のこの五年間があったからこそその後の華々しい活躍が可能だったのである。この苦しい五年間の蓄積がその後の活躍を用意したことはまちがいないのだ。

二 吉本隆明の戦後詩

ここに当時の作者の心境を詩にした作品がのこっている。

一九四九年冬

荒涼と過誤。

とりかへしのつかない道がここに在る
次第に明らかに視えてくるひとつの

過誤の風景

ほくは悔悟をやめて

しづかに荒涼の座に堕ちこんでゆく

むかし覚えた

妙なこころ騒ぎもなくなつてゐる

たとへばこのように

ひとと訣れすべきものであらうか

一九四五年頃の冬

あたりは餓筭地帯であつた

いまはぼくのほか誰もゐない

ひとびとのくらしがゆたかになつたと

たれが信じよう

それぞれの荒涼の座に

若者たちは堕ちてしまつてゐる

夜。

頭から蒲団をひつ被つて

フリードリッヒ・リスト政治経済学上の遺書を読む

(中略)

ぼくはここに

だが一つの過誤をみつけ出す

諦らめて

僕の解き得るちいさな謎にかへらう

一九四九年冬。

深夜。

そつと部屋をぬけ出していつものやうに

父の枕元からたばこを盗み出して

喫する

あいつもこいつも

賑やかな奴はみんな信じられない

どうして

思想は期望や憧憬や牧歌をもつて

また

絶望はみみつちい救済に繋がれて提出されねばならないか

ほんたうにそう考へてゐるのか

だがあいつもこいつもみんなこたへない

いいやあんまり虐めるな

一九四三年ころでさへ

誰も答へてはくれなかつた

その時から

ぼくもそれからほかの若者たちも

いちやうに暗さを愛してきた

(以下略)

この詩は「吉本隆明代表詩選」の選者の一人の瀬尾育生もその一〇詩の中の一つとしてやらんでいた。そのくらい重要な作品である。私はこの作品のタイトルが気になる。事実この作品は一九五〇年四月の「詩文化」に発表されたのである。しかし作者はそのタイトルを一九四九年冬とつけている。私には作者もまた一九四〇年代の作品にこだわりがあったのではないかと思う。四〇年代を戦後詩の決算期と考えていたのではないかということである。

それにしてもこの詩の冒頭は重要である。

「荒涼と過誤。

とりかへしのつかない道がここに在る

しだいに明らかに視えてくるひとつの

過誤の風景

ほくは悔悟をやめて

しづかに荒涼の座に堕ちこんでゆく

むかし覚えた

妙なところ騒ぎもなくなつてゐる

たとへばこのように

ひとと訣れすべきものであらうか」

これが吉本隆明の戦後詩であった。ひとつの過誤の風景がしだいに視えてきた、一九四〇年代の後半。この間、難問だった戦争とはなにかを考えて、政治経済学まで読んだ。もう誰も信じられない。ひとり荒涼の座に墮ちこんでゆくしかない。悔悟もこころ騒ぎもなくなっていくために敗戦後五年間が必要であった。身近な人たちや塾の先生一家も失っていた。このようにひとと別れすべきものなのか。人々の暮らしが豊かになったと誰が信じられるか。このころの心情を共有するために作者は太宰治の「春の枯葉」の公演をしようとした。賑やかな奴はみんな信じられなかった。戦争とは何であったのかに答えてくれる人は誰もいなかった。これからは自分一人で考えてゆくしかないのだ。暗さを愛していた。

三 「エリアンの手記と詩」

吉本隆明はひそかに敬愛していた塾の先生の一家が一九四五年の三月十日の東京大空襲で亡くなったことに衝撃をうけた。だからこの時代に「エリアンの手記と詩」を書き、「海はかわらぬ色で」という長詩をかいた。「エリアンの手記と詩」の中で、先生にこんな詩を語らせている。

「エリアンおまえはこの世に生きられない　おまえはあんまり暗い

エリアンおまえはこの世に生きられない　おまえは他人を喜ばすことができない

エリアンおまえはこの世に生きられない　おまの言葉は熊の毛のように傷つける

エリアンおまえはこの世に生きられない　おまえは醜く愛せられないから

エリアンおまえはこの世に生きられない　おまえは平和が堪えられないのだから」

先生が生きていたらきっとこういわれたであろうという言葉である。これも吉本隆明の戦後詩の一つである。荒涼の風景の中で絶望的な心境が詩的な比喩を使って表現されている。思想が希望や憧憬や牧歌や救済とともに語られることはない。この詩もまた多くの詩の大衆に愛好されなかったことは言うまでもない。しかしこの詩も我が国の戦後詩の秀作であることは間違いない。

この後すぐに吉本隆明の言葉は「マチュウ書試論」でキリスト教を批判し、「前世代の詩人たち」で抵抗詩人たちを批判し、「四季派の本質」で抒情詩人たちを熊の毛のように傷つけたからである。

もう一つ、恩師、今氏乙治への鎮魂歌だと私が思っている「海はかわらぬ色で」がある。私はこれも彼の戦後詩のひとつだと思っている。最後の二連を引用する。

「もはや訪ねあいて

わたしはわたしの身代わりを確かめ

わたしの歳月を告げるあしどりはない

疲れうしなわれた豊かさで

わたしはひきかへす

もはや夜があり

わたしは断たれる

わたしを模倣し

わたしを想い起こさせるものから

どんな宿命が

わたしを模するものを訪れても

すべてわたしは茫然とたち

わたしが亡びるさまを視る

あたかもすでにわたしが亡びたとほりに

もつれあつたいのちが

そのままおおきく変つてゆき

かへりみることが

もう無用のこととなり

なおつらいことに感じられ

けつしてふりかへることをしない

いくらかはひとをあいすること

いくらかは生きていくことに

ふりわけられて」

作者が戦争をくぐった後の心境を詩にした、優れた戦後詩であるとおもう。それが尊敬した先生の死を想像しながら書かれたかと思うと、その詩的水準は高いものがある。

四 戦争をくぐりぬけた思想

吉本隆明は「戦後詩の体験」の中で自己の戦後思想を次のように語っている。

「戦争をくぐった体験というのなら現在ある年齢以上の人々をひとしくとらえている。それならば体験から何を中心として選ぶかが戦後を生きることの意味を与えるはずである。いま戦後詩人たちの体験の意味を、強者としてふるまった論理が敗北しそれと対照的に、弱者のように強いられた論理が勝利したことを、とことんまで身体に刻み込んだ体験というところまでとらえてみる。強者の論理というのはたとえ近代日本の軍隊の思想である。ある戦闘目的があるとすれば、その戦闘目的を成就するためには人間の命は軽いものだ、つまりいのちをす

ててしまってもその目的をとげなければならぬ。そして命をすてないのはいわば弱者であり、だからある目的のためには命をすてうることはいわば、強者なんだという考え方とうけとってみる。戦後詩人たちの出発の体験はそういう強者の論理のつぼの中にいちどは叩き込まれ、そこから出てきた体験だと考えたらわかりやすい。」

この戦争目的のために強い意志を持って戦う日本の軍隊の思想は結局ある目的のためには命を安くしてもよいという論理でもあって、本質的には弱いものだったことがわかった。吉本隆明は敗戦を装備や物質力の貧弱さとは考えていない。それは思想が思想としてまけたのだとかがえていいる。日本の軍隊を支配した強者の論理は本当は脆弱で圧政に虐げられたものが身に着けた貧困な論理だといふのである。つまり人間の生命と個人は重要であり、いざとなったら逃げて手をあげちゃえばいいんだ、それで命があぶなくなったらどこまでも生き延びよという論理を対照的に弱者の論理とよぶならば、それを本質的に身に着けた西欧近代の軍隊こそ強靱であった。そして見事に彼らにうちまかさされたのである。このような戦争体験をした戦後詩人たちの詩がそれまでとおなじであるはずがない。吉本隆明はそこでひとりの女流歌人を紹介している。茨木のり子である。

根府川の海

(前略)

沖に光る波のひとひら

ああそんなかがやきに似た

十代の歲月

風船のように消えた

無知で純粹で徒勞だった歲月

うしなわれたたった一つの海賊箱

ほっそりと

蒼く

国を抱きしめて

眉をあげていた

菜ッパ服時代の小さなわたしを

根府川の海よ

忘れはしないだろうか？

女の年輪をましながら

ふたたび私は通過する

あれから八年

ひたすらに不敬な心を育て

(以下略)

この茨木のり子の詩は根府川の駅を通りながら、お国のために尽くしてきた無知で純粹だった自分をふりかえりつつ徒勞だった過去を反省している姿が表現されている。駅の向こうに見える青い海はかわらないが、戦争を生き抜いた自分は考え方も随分変わったことを痛感している。戦後詩の体験としてこのような微妙な心理を作品に読み取るところに吉本隆明の優れた批評眼があらわれている。戦後詩だからと言って戦争体験を強調したり平和思想をうたわなくても優れた戦後詩は書けるということである。戦争をくぐった度合いをこの詩で見ると、強くもなければ弱くもない、ちょうどいい度合いであつたということである。

ここで吉本隆明はもう一人の戦後詩人を紹介している。「荒地」の黒田三郎である。特に戦争をうたつてはいないけれど、これこそ戦後詩そのものである。

「賭け」

五百万の持参金付きの女房をもらったとて

貧乏人の僕がどうなるものか

ピアノを買ってお酒を飲んで

カーテンの影で接吻して

それだけのことではないか

美しくそう明で貞淑な奥さんをもらったとて

飲んだくれの僕がどうなるものか

新しいシルクハットのようにそいつを手にかけて

持てあます

それだけのことではないか

ああ

そのとき

この世がしんとしずかになったのだった

その白いビルディングの二階で

僕は見たのである

馬鹿さ加減が

ちようど僕と同じ位で

貧乏でお天気屋で

強情で

胸のボタンにはヤコブセンのバラ

ふたつの眼には不信心な悲しみ

ブドウの種を吐き出すように

毒舌を吐き散らす

唇の両側に深いえくぼ

僕は見たのである

一人の少女を

一世一代の勝負をするために

僕はそこで何を賭ければよかったのか

ポケットをひっくり返し

(以下略)

賭けるものが何もないのである

僕は

僕の破滅を賭けた

この詩を戦後詩と読むかどうか疑問とする人もいるかもしれないが、ここに戦後人間の心理を読むのが吉本隆明の特異なところである。つまり美しくそう明でお金持ちをもらったとてそれはシルクハットをどうかぶつたらいいかわからないで、もてあますようなものだというのである。その時にちょうど馬鹿さ加減が自分と同じくら

いで貧乏でお天気屋で強情な「二つの眼には不信心な悲しみ、ブドウの種を吐き出すように毒舌を吐き散らす」ような女と一緒にすると表現されている。ここに表明されている価値観こそ我が国の戦後社会が生み出した独特の人間だったのである。ここに表現されている女性はどこか先の茨木のり子の批判精神と似ているところがあると思われる。

この後吉本隆明は鮎川信夫の「繫船ホテルの朝の歌」を引用している。それは「俺たちの夜明けには 疾走する鋼鉄の船が 青い海の中にふたりの運命をうかべているはずであった ところが俺たちはどこへも行きはしなかった 安ホテルの窓から 俺は明け方の街に向かって唾を吐いた」という詩であった。戦争という強い者が支配する世界でさんざん苦労してきて敗戦を迎えた戦後人間がやっと戦後社会のなかで自由に活動したいと思っていたのに、どこにも出発できぬまま安ホテルに女と泊まることくらいしかできない。この虚無的なわびしい現実が我が国の戦後社会の気分であったことを鮮明に表現している。その意味でもこの鮎川信夫の作品も戦後詩の秀作であったといえる。

戦後詩は戦争の時代を痛烈に批判しながらも戦後社会を生き抜く倫理を構築してきたのである。そこではそれまでわが国を支配してきた強い者の論理が意外と弱かったことを批判しつつ、新たな倫理を模索してきたのであった。その模索の状況をいくつかの戦後詩作品を読むことで、追体験してもらえればこの小論の目的は果たされたといえる。